

俚諺正徳四年本國の俗妻を呼で阿釜と云、據あり、酉陽雜俎云、王生善卜、有賈客張瞻將歸、夢炊白中問、王生、生曰、君歸不見妻、白中炊無釜也、瞻歸妻已卒、かくいへれば、其心いまだ若衆のことにはいはざりしことゑるべし、

〔松屋筆記 六十六〕男色をオカマと云ふ事

滑稽詩文の詩に、無限心中藏彌露、灯前一夜涙如雨、他時有時可焦思、鹽竈烟兮松島浦云々、此詩松島に待とよせ鹽竈にオカマをよせたるなり、後世男色をオカマといふも縁源あり、

男色密道若道

男色の事を、密道若道などいへり、若氣勸進帳に、三國有密道、厥用雖同、厥名各別、支那謂之押軛、身毒謂之非道、扶桑謂之若道、通用于三國、真俗共賞翫矣、殊本朝者、桓武天皇御宇、從弘法大師、此道專盛、而京鎌倉之諸五山、大和近江之四ヶ大寺、其外都鄙諸宗、公家武家之人、雪月爲便、詩歌爲媒云々、また剩以密道容易流布、樵蘇女子小兒諳之、搢之云々、男色は周の代に彌子瑕あり、漢に鄧通董賢の類あり、淮南王有愛好童年、その外舉に違なし、男倡といへるは、男色を賣者にて、本朝のカゲマ也、

〔賤者考〕男色はいつ頃よりかありはじめけむ、始詳ならず、まづは佛法渡來の後、僧の女犯を禁ずるより出しは、おのづからの勢なり、俗傳に、何の據もいはずして、空海よりなどいふは、もと言傳ふる所ありしにや、これどおのれ(本居内遠)は別説ありて、今少し古かる、中世以來の事は、季吟が岩つ、じといふ書にも記せり、凡は僧徒のしわざなり、されど中世以後、軍陣には婦女を誘ふ事を禁ずるより、木曾義仲將軍の、巴山吹な起りて、應仁以來の亂世より、武家にも執する輩多く、その比よりや、盛になりたるも、おのづからの勢なり、今治世となりても、その俗習残りて、元祿享保などの頃までは盛なりと見えて、男色の戲ざうし多くありしが、や、それより衰へて後も、僧